

アンカーコズミカ　刊行記念
山岸勝榮先生講演会

The Anchor Cosmica English-Japanese Dictionary

株式会社学習研究社　辞典編集部

『アンカーコズミカ英和辞典』の刊行を記念して、編集主幹の山岸勝榮先生に、全国各地で講演をしていただいております。高校の英語科担当の先生方をお招きした今回のテーマは、「満足度の高い英語授業の創造」です。その内容をここで紹介します。

満足度とは何か、どうやってはかるのか

私の勤務する明海大学では、学生による授業評価を行っています。前期・後期の終わりに各一回ずつ無記名でアンケートをとり、10 項目５段階で回答してもらって、その結果は学生と教員、そして学生の保護者が学内のサイトで見られるようになっています。

質問の内容は、「授業の内容や進め方・評価方法についてあらかじめ周知されていたか」「教材・資料の利用が適切かつ効果的だったか」「教員の意欲・熱意が感じられたか」などで、最後に、総体的にこの授業に満足しているかを聞きます。例えば去年の私のある授業では、５点満点で 4.72 点。一応、学生に満足してもらったようです。自己満足の授業をするのではなく、何十人もの学生の客観性のある評価を受けることには価値があると思います。評価されることによって自己分析ができ、教師自身も伸びていくんですね。

満足度の高い授業とひとことで言っても、それぞれの先生にそれぞれの方法があるはずです。ただひとつ確かで忘れてはならないのは、それが生徒、学生のためであるということ。そこでひとつの例として、私の授業例を紹介します。

学習意欲を欠くクラスでの英語の授業

私は英米語学科を教えていますが、他の学部、あるいは非常勤講師として他大学でも授業をしていますので、中には学習意欲を欠くクラスや学生もあります。しかし、それを何とかするのがプロの仕事です。

私はまず学生に、私を好きになってもらう努力をします。例えば林（はやし）君という名前の学生がいたら、「林」ということばの由来は、幸せを守る神様のいるところという意味なんだよ、というような話をして、「いい名前だね、自分の名前を大切にしなさいね」なんて言いますと、だいたいその林君は僕を好きになってくれるんですね。そうすると次の週から、「先生、教科書ってどこで買える？」なんて言ってくれる。そんなふうにして、まず名前から始めて自分に誇りを持たせるんですね。

それから、英語への興味を持たせるために、専攻や各人の趣味に関係した話題を利用します。例えば不動産学部の授業では、「外国人が君の店に来て、half bathroom の部屋はあるか、と言ったとする。half bathroom と full bathroom って何？」なんて話をすると、学生は目が輝きだす。不動産関係の学生だったら、英語は嫌いでもこんな話は大好きなんですね。そうしたら、このように英語というのは生活に密着している、そのことだけでも知ったらこの授業に出た甲斐があるね、と話します。経済学部の学生であれば、経済の話をするわけです。こんなふうに、何かその学生に興味を持ってもらう話をするためには、教師が該博な雑知識を持っている必要があります。

また、授業の中では「発言券」を作り、学生が発言する機会を増やすようにします。年度の初めに一人 100 枚用意させ、授業中に一回発言したら１枚、よい発言であればもっと多く受け取ります。普段あまり発言しない学生は、意識的に易しい質問に答えさせて、「よく言えたね」と言って券をもらって、点数をあげるんですね。この膨大な量の発言券を整理するのはとても大変な作業なのですが、先生が授業で忙しい、辞典作りで忙しいといっても、学生には関



係ありません。教室の学生にとっては先生が唯一の存在で、先生しかいないのですから、責任を持たなければいけません。

ある授業の学生のアンケートに、「英語がこんなに面白いものだとは思わなかった」という感想がありました。このことばを見て泣きたくなりました。かわいそうに、誰がこんなことを言わせるのでしょう？　他ならぬ、私たち教師です。このような現状でいいのでしょうか。学生は、英語自体が嫌いなのではなく、英語についていろんなことを言われるのが嫌いなんですね。関係代名詞の何格だとか何用法だとか、英語の文法、規則の理屈が嫌なんです。

「満足度の高い英語授業の創造」のために

満足度の高い授業をするときに大切なことは、まず考えさせて、気づかせることです。

例えば、次のような例文。“In Japan people scatter beans on February 3.”と言ったとき、日本人はわかりきっているからこの英文を正しいと思ってしまいますが、日本文化に詳しくない外国人などは、ただ農家の人が豆を蒔いているのだと勘違いするでしょう。この文に、文化についての情報を付け加えることを学生にさせます。“to drive out [away] evil spirits”のようにです。これを見れば外国人でも、これは宗教行事か何かだろうと想像がつく。日本の英語教育には、ここが欠けているんです。だから誤解を受けたり、正しく伝わらなかったりします。ここをわ

かるために、我々教師が日夜学ばなくてはならないのです。自分が大学で学んだだけの、乏しい、不十分な知識だけで英語を教えてきたら、それ以上のことは出てきません。このように、考えさせて、文化の違いを教える例は、入試問題で出てくる用例の中にもたくさんあります。

また、一文に対し場面や登場人物を変えて多様に和訳する練習をします。“Where did you get that?”という文を、あらゆる場面を想定して、どんな日本語にする？　と学生に尋ねます。そうすると「どこで手に入れたの」と訳す学生もいれば、「どこで買ったの」「誰からもらったの」などと訳す者もいる。文脈によってさまざまに訳せるわけです。それらすべてに、そうだね、そうも訳せるね、よくできたね、と褒めて、できるだけいろんな場面を考えながら発言させるんですね。

そして発言を促すために、5W1H を使った開放的質問 Open Question、また付加疑問文などの Check Question の多い授業を心がけています。Yes、No で答えられる Closed Question を使うと、授業が終わってしまうのが早い。学生が説明せざるを得ないようにするのです。

さらに、楽しい授業、知的興奮を得られる授業を提供することが大切です。例えば、“I brush teeth every morning.”と言った学生に、「誰の歯を磨くの？」と聞いても、きょとんとしている。自分の歯だからmy teethだよ、と教えた後で、「でも君の英語はすごいよ、“I brush teeth every morning.”と言ったら、君は歯科衛生士なのかなとか、あるいはお爺さんの入れ歯を磨いているのか、なんて思う。そういう意味で言ったのならパーフェクトだよ」なんて言うと、ものすごく喜ぶ。自分の英語はいい加減だと思ったけど通じるんだ、ただ通じ方が違うんだと気づく。そして、所有格というものがよく理解できる。またそこで先生が「だめだよお前、間違っている」などと叱らなかった、減点しなかった、という喜びがある。こうなるとしめたもので、英語に対する抵抗感をなくしてくれます。

英語教師としてのモットー

私には、英語教師としてのモットーがあります。まずは、世界の言語文化間に優劣をつけてはいけないということ。十人十色で、世界の文化はみんな等しいんだ、みんな大切だよ、と学生に伝えます。

次に、ことばには必ず文化が作り出した意味、connotation があります。それを意識して英語の世界を教える努力をしています。これは「アンカーコズミカ英和辞典」で、いちばん心をこめたところです。

また、英語を日本語の訳語だけで考える危険性を常に意識しています。例えば angry という単語は、日本人は子供たちも、場合によったら学校の先生も、みんな「怒る」と理解していますけども、これはデートをすっぽかしたとか、遅刻してきたというくらいで使うことばではなく、相手がカンカンになって、場合によっては殴られるくらいの雰囲気がある中で使われるものです。だから日本人がこのことばを使うと、ネイティブスピーカーが大変驚きます。じゃあなんて言うかというと、英語では upset って言うんですね。この upset ということばが、どういうわけか学校ではあまり使われないし教えられない。それは angry ということばを「怒る」という訳語とイコールで結んでしまって、それだけが頭の中で固定されてしまったからです。一番大切なのは、英語を学ぶのは、英語圏の人たちの物の考え方を学ぶためだということ。英語の授業はそれを教えるものでなくてはなりません。

そして、教師が率先して行動に移すことが重要です。例えば私は、どんな歌も英訳できるということを示すために、「仰げば尊し」や「シャボン玉」といった、日本の歌を英訳しました（左下囲み参照）。かつてこれをイギリスで歌い、日本にはこういう素晴らしい歌があるのかと、とても感激されたことがあります。英語とはなんなのか、日本語をどこまで英語に訳せるのかということを考えるために、これからもやっていきたいと思います。

教師の責任は重大

私が教師になってから、いつも戒めとしている聖書のことばをご紹介します。「汝ら多く教師となるな。教師たる我らの更に厳しき審判（さばき）を受くることを、汝ら知ればなり」。ここで言う教師というのは、神のことばを取り次ぐ聖職者（rabbi）の意味ですが、いずれにせよことばによって人を導く立場です。諭し教える、そういう“ことば”を使う人間が、どれだけ影響を与えるかということを考えなさい、と説いているのです。教師の責任は重大だというわけですね。

英語を教えるにあたっては、何より、英語の先生自身が英語を好きにならなくてはいけないと思います。英語が好きで好きでたまらないということを示すと、だいたい学生はこれを見て、判断してくれます。そしてどういう授業をしても、英語を好きになってもらいたいという思いは、必ず通じるはずです。それしかないのではないでしょうか。

仰げば尊し
作詞：不詳　　作曲：不詳　　英訳：山岸勝榮 (C)

１．仰げば　尊し　我が師の恩
教えの庭にも　はや　幾年（いくとせ）
思えば　いと疾（と）し　この年月（としつき）
今こそ　別れめ　いざさらば
How fast time flies, I can't believe how quickly
the moments have passed.
The precious years have come and gone too soon,
here with you.
I've learned from you the right way to do
what must be done.
Now is the time to say farewell,
with an eternally grateful heart.

★山岸先生のホームページには、今回のお話に関連した情報が満載です。ぜひご参照ください。
「山岸勝榮　英語辞書・教育研究室」
http://jiten.cside3.jp/

アンカーコズミカ英和辞典
B6 版／２色刷／総 2,224 ページ
定価 3,465 円（税込）
Gakken
お問い合わせ・お申し込みは
学研 出版サービス室
TEL 03(5434)1820　FAX 03(5434)1832
〒141-0031　東京都品川区西五反田 1-30-1
ウイン五反田ビル 6F